

直腸癌の壁外浸潤距離に関する臨床的意義プロジェクト研究
久留米大学外科 白水和雄

活動要旨

2008年7月3日に直腸癌の壁外直接浸潤距離に関する臨床的意義のプロジェクト研究会を開催し、中間解析結果の報告をいたしました。

1. 集積状況

- ①29施設中26施設からデータの提出があり、集積症例数は1019症例であった。
- ②死因不明例（癌死か否か）、追跡期間が不十分な症例、再発年月日の記載不備例、深達度不明例等を除外した955例で、中間解析を行った。

2. 結果

- ①stage2では、壁外浸潤距離が6mm未満と、6mm以上で生存率、健存率に有意な差が認められた ($p<0.0001$)。
- ②stage3aでは、5mm未満と、5mm以上で生存率、健存率に有意な差が認められた ($p<0.0005$ 、 $p<0.0132$)。
- ③stage3bでは、3mm未満と、3mm以上で生存率、健存率に有意な差が認められた ($p<0.0430$ 、 $p<0.0278$)。

以上の結果より、壁外浸潤距離は、生存率や健存率に影響を与える因子であることが推測された。

3. 今後の検討事項

- ①欠損値や修正すべき項目が、かなり存在しているために、これらの項目について極力空白データが無いように各施設に願います。
- ②平成20年12月までに、データの解析を行い、次回の研究会で最終報告をする予定である。